

## 第13回 人権教育学習会報告

日 時 : 2025年 6月17日(火)14:30~16:30

会 場 : 横浜市教育会館(サンライズホール) 4階エコーレ

映画上映:『ノルマル17歳。－わたしたちはADHD－』

トーク : 北 宗羽介 さん(監督・プロデューサー)

参加者数: 計204人(内訳:参加者184人、関係者20人)

アンケート回収数: 127 人分



○あなたの所属をお答えください

①小学校教職員 61 ②中学校教職員 35 ③高校教職員 15 ④特別支援学校教職員 8 ⑤教育行政職員 7 ⑥その他 1(組合専従役員)

○本日の内容はいかがでしたか

①大変良かった 88 ②良かった 29 ③普通6 ④あまり良くなかった1 ⑤良くなかった 1 ⑥無回答 2

◎ご意見、ご感想をお聞かせください。(抜粋)

○とても良い内容でした。

○学校現場に非常に役立つ内容だったなと思いました。

○障害者手帳のない発達障害当事者の困難について改めて、社会としてどう向き合うべきなのか考えさせられました

○ADHDの方に関わる上で、さまざまな視点で考えるきっかけとなりました。特に、本人を取り巻く環境というものが、生き辛さに繋がってしまうと改めて実感しました。これからの教員生活で、自分なら何ができるか、またどのような手立てが有効か今以上に考えながら活動していきたいと思います。良いきっかけをいただき、ありがとうございました。

○本人目線でとてもリアルに描かれていた。自分にも当てはまるものがいくつかあった。誰か1人でも理解者がいて寄り添ってくれる人がいるかどうかが本当に大きいと思った。それが学校の職員でなければいけないとも思いました。

○ADHDの女の子という設定が非常に興味深かったです。ADHDという病名を診断されても、その子たちにどう向き合っていくことの難しさを実感しました。

○こういった発達障害をあつかった映画があることを嬉しく思います。社会には普通というレンジに収まらない大人、子どもがたくさんいて、みんな苦労しながら一生懸命暮らしていると、日頃から学校現場で感じていました。周りに合わせられない生きづらさも抱えているのもよく見ました。私自身も誰しも苦手なことがあり、普通に合わせようと四苦八苦していることがあるはずなのに、いつの間にか線引きして普通からはじくような社会が出来上

がっていることがあるなど感じます。こういった作品上映を通して発達障害をいろんな幅を持った人がいてその中の1人だと受け止めてくれる社会の空気がより柔らかくなる事を願います。

○発達障害の視点からの捉え方は、よかった。彼女たちが学校、社会から受け入れられたらどのように成長していくか、続編をみていきたい。また、発達障害が社会に浸透してない世界観となっていたので、浸透していたらどのようになるか、見本となる物語があってもよいかと思う。(今回の親のような人に見てもらえるように)

○障害をもつ当事者だけでなく、その当事者を取り囲む人達の関わりや特性、障害を理解する重要性を考えさせられました。

○嘘のないリアルな作品で、ADHDを知るというテーマだけでなく、生きづらい人へのゆっくり生きて良いというメッセージも同時に含まれており、感動をしました。

○軽度の知的障害の生徒を対象とした学校で勤務しています。まさに、自分では如何ともし難い、セルフコントロールが難しい生徒の進路支援をしています。変わりたいと表明しても、その瞬間には思っても、持続しない。学習も仕事も持続しない。人に迷惑をかける、落ち着かない。という無限ループから抜け出せずに17歳を迎えています。本人も難しさを感じていると思いますが、支援する職員も「社会的自立」に向けた支援について悩みながら、日々過ごしています。映画で発せられた当事者のセリフは、生徒の叫びのように受け取りました。理解されにくい特性だからこそ、家族も支援者も本人との関係が歪んでいく現実がありますが、本人がよく生きたいときと願っていると心に留めて、サポートしていきたいと感じました。

○発達障害を扱った映画を初めて観ました。いろいろと考えさせられました。たくさんの人がこの映画を観たことをきっかけにADHDについての理解が深まるといいなと思いました。

○久々に映画でしたが、終始食い入るように見ていました。周りの人の受け入れ体制、心の広い人が増えていくとお互い過ごしやすくなるのかなと思いました。

○教育現場において、どの子にも居場所があることの大切さを改めて考えました。また、子どもだけでなく、教職員、家族、すべての人において共に相手を受けとめ、尊重し、自分らしく生きることができる共生社会の実現を教育者の立場から考えていきたいと思いました。本日はありがとうございました。

○なんとなくADHDについては理解しているつもりでいましたが、当事者がどのように感じているか、考えているか、困っているかなど、想像したら理解できていないことがたくさんあることを痛感しました。今後の子供との接し方や指導・支援にいかしていきたいです。ありがとうございました。

○クラスの中に似たような特性をもっている児童がいて、近い苦しみを感じているのかなと思いました。何をしてあげられるかは分かりませんが、今後の指導に生かしていければと思いました。

○映画のなかで、主人公が成長しているという台詞が心に残りました。実際に困った状況になると何とかしなければという思いになりますが、きっとその子も事情があるんだなと考えられるようになりました。

○発達障害者同士は、あんなにも互いを思い合えるのか、実際はどう関わり合うのか、もう少し知りたいです

○毎日子どもたちに接しているとADHDや自閉の子たちが当たり前にあります。ところが、社会の中の大人を見ると、あまりそういった個性を持つ人が見当たらなくなるわけです。単純に成長の中で社会に溶け込んでいるのならそれで良いのですが、必死で適応していたり隠れていたりする事もあるのだろうか考えると複雑な気持ちです。色々な人が「普通に」過ごせる世界にしていかなければなりませんね。

○今までの自分の生き立ちにも、目の前の生徒達にも被るものが多々ありました。朱里みたいな生徒も、絃みたいな生徒もよく見かけます。私は大人としての経験値で子供達の性格を判断してしまっていますが、自分が思っている以上にこういった困り感を抱えている子供達は多いんだなと思いました。ただ、大人数を相手にするときはこの子達を救ってあげていないなと、頭の中で考えていました。全体の中の個であり、個があつての全体なので、その時その時で見極めながら、生徒達と接していきたいと思います。